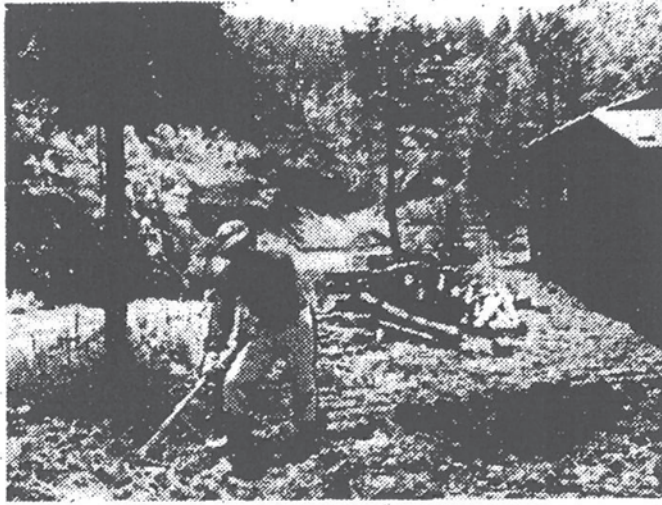


古里でキャンプ場造り

小国町出身の穴見さん

都会の生活を離れ

「遊水峡」と命名 一人で荒れ地を整地



一人、黙々とクワをふるう穴見さん

「荒れるいっぽうの古里を守」国町西里字倉本に帰り、一人荒れ地にクワを入れ、だれもが楽

しめるキャンプ場を造ろうと頑張っている人がいる。

北九州市若松区今光一丁目、建築業穴見祝二さん(四七)。穴見さんは小国生まれの小国育ち。

大工の腕を頼りに北九州へ出て二十五年になるが、十年前の里

帰りの際、子供のころ釣りや山菜採りで遊んだ杉山や川の荒れ方に激しいショックを受けたという。

以来「何とか自分の力だけで古里を守る方法はないか」と考えた末に、キャンプ場造りを

思いついた。子供も片付いた今年の四月、穴見さんはその夢を実現させるため北九州での仕事もやめ、古里に残る兄の農林業穴見吉明さん(五七)の元へ、自分が水遊びをした通称鯛田川沿いの荒れ地三十坪を購入し、キャンプ場「遊水峡」と命名、兄や倉本地区の協力を得ながら、一人黙々とスコップやクワを使い整地作業を進めている。

これまでトイレと山小屋(五十三平方メートル)を建てたが、作業はこれからが本番。早朝から

日暮れまでの重労働だが、小さい時は百姓をしていたので別に苦にならない。それより人がおおらかで温かみのある田舎はいいですね。都会へ出て初めて田舎の良さがわかりました」と穴見さん。

整地後には芝を植え、紅葉やケヤキ、桜も植樹して「将来は見て(山菜を)採って(川魚を)釣って、だれもが楽しめるキャンプ場にしたい」と、今日もクワをふるっている。

校区ぐるみ梅ちぎり

「戦果」は即売、教材費に

上益城郡甲佐町の宮内小(川地義継校長、八十八人の全児童と父母が二十八日、学校近くの梅林で梅ちぎりをした。校区ぐるみの年中行事で、梅の実を販売して教材費に充てる。



母親たち

甲佐町宮内小

の費さを教え、益金は学校活動の充実にと植えたもので、消毒や下刈りなどの管理はPTA(嶋村男次会長)でしている。男子と父親が竹さおでたいて実を落とし、女子が拾う役目。約三時間かかりでさつと一トンを収穫した。河原のテント内ではお母さんたちが四、五つ「戦果」を袋詰めし、キロ二百円の安値で即売。事前に有線放送で呼び掛けていたため校区外や町外から買いに来た人もあり、大半がその場でさげられた。残った梅は